

ふるさとふちゅう

再発見

【第64回】府中が農村だったころ(24) 府中町内の山(7)

江戸時代には、山は藩有の御建山、入会山(共有)の野山の他に私有林の腰林がありました。江戸時代の山の実態を知る史料として藩に提出する通称「山帳」があります。府中村では宝永5(1708)年と享保13(1728)年の「安芸郡府中村御建山御留山野山腰林帳」が残されており、いずれも『安芸府中町史第2巻』に収録されています。これには宝永5年では野山は2か所で腰林が139か所、享保13年には野山が6か所で腰林が159か所とあります。この数字から野山が増えたこと、腰林が細分化されていくことが分かります。この史料には山の種別、場所、面積、所有者、樹種が1か所ずつ記載されています。樹種は松・小松・雑木・草山・竹です。本来、町域では広葉樹が主ですが、燃料や肥料にする有用な樹種を植えたのでしょう。享保13年の山帳を詳細に分析すると159か所の山は88人によって所有されています。最大の所有者は升屋新左衛門で「神ヶ迫・午王田平山・新宮上・杣ヶ原・野地・走り田・柳ヶ迫」の7か所の山、約

3ヘクタールを所有しています。1ヘクタール以上の所有者は7人います。『安芸府中町史第1巻』には藩に提出する享保9(1724)年の「差出帳」に365人の本百姓がいたと記されています。山を所有する88人は全体の24%で、残りの277人は田畑の肥料となる草木を入手する山を持っていないのです。この76%の本百姓は共有林である野山で草木を入手したのでしょうか。宝永5年の山帳では、付箋に「野山のあけくら山・長尾山は宝永4(1707)年に源内という人物から代銀80匁で購入した」と記されています。野山が2か所から6か所に増えたのは、肥料を求める本百姓たちの要望に応えたものでしょう。



出典：『安芸府中町史第1巻』
267ページ

府中町文化財保護 審議会委員

菅 信博

魅力発信!

まち記者レポート 街を歩く

まち記者 阿部 頼繁 さん

宮の町の通りを歩いていると、元気あふれる店とひっそりと佇む店が軒を連ねていた。

元気あふれる店はリユースステーション「みなくる」。店長の松本さんは「捨てるのはもったいないから物の循環システムを作ろう」と30年前からフリマ活動を始めて、昨年3月に自分の住む府中町で開業した。店内にはあふれんばかりのリユース品。お客さんが「見るだけでも楽しいんよ」と話されていた。

一方、その二軒隣りには「PEG」と書かれた看板と静かに佇む店構え。入ってみると懐かしいレコードの優しい音楽が出迎えてくれた。カウンターには珈琲ミルとウイスキーとレコードプレーヤーが置かれ、その後ろの収納には大量のレコードがあるが、とてもすっきりしている。おだやかに微笑むマスターに聞いてみると「邪魔な物は置かない、シンプルズベストです」とのこと。メニューもシンプル。また、「いろんな人の話を聞けるのが楽しいんです」とも。確かにこの店のシンプルさは、人とおしゃべりを勧めてくれる空間を作っていた。

2つの店を外から見ると違った雰囲気に見えたが、どちらも人や人の生活を大切にしていた。



軒先にリユース品が並ぶ「みなくる」



落ち着いた雰囲気の「PEG」